

三角縁神獸鏡の二・三の問題について

西村俊範

はじめに

三角縁神獸鏡の研究は、基本的に日本の前期古墳時代の研究の一部として取り扱われてきた。従って、研究者もまた日本考古学の研究者が大部分であり、その研究内容もあくまで日本考古学研究の枠組みの内部で終始していた。それは資料がほとんどすべて日本国内にあるという三角縁神獸鏡の特性にも基づくものであり、ある意味では当然のこととも言える。しかし、三角縁神獸鏡もまた中国の鏡製作の伝統の中に位置づけられ、決して一鏡のみで孤立した存在ではない以上、どう位置付けられるのかを具体的かつ実物に則して総合的に示す作業を行わなければならない⁽¹⁾。研究者にも三角縁神獸鏡に関連した中国鏡に関する専門家としての知識・能力が不可欠となる。仮に多くの研究者が「日本考古学の一分野の研究」で事足りると考えたとしても、「中国の鏡研究の一分野」としては総合的に見てまだ研究上不可欠なピースが欠けていると筆者には映る。本稿はそのような問題意識に基づいて、三角縁神獸鏡を中国鏡研究の枠組みの系譜の中に位置づけようとする試みである。

1. いわゆる三角縁神獸鏡の区分け

鏡の名称は、当該鏡の内区主文様を以て鏡名の主要部分とする大原則に基づいて付けられる。しかし、「三角縁神獸鏡」という名称は日本では鏡式名としては扱われていない。たとえば、『大古墳展』のカタログに付された「三角縁神獸鏡目録」⁽²⁾を見てみると、そこには神獸鏡以外の鏡式のも

表1 倭国向け中国鏡群

総称 (統合概念)	No.	鏡式	紀年	出土古墳等
模倣鏡	1 A	画文帯同向式神獸鏡(A)	景初三年	和泉黄金塚
	B	半円方格帯同向式神獸鏡(A)	—	安満宮山(5号)
	C	盤龍鏡	景初四年	広峯14号, 辰馬考古資料館
三角縁 模倣鏡	2 A1	三角縁同向式神獸鏡(A)	景初三年	神原神社
	A2	同上	正始元年	森尾, 蟹沢, 御家老屋敷, 桜井茶白山
	B	同上	—	椿井大塚山(25号), 久保, 湯迫車塚, 上平川大塚
	3	三角縁同向式神獸鏡(B)	—	宮ノ洲
	4 A	三角縁環状乳神獸鏡	—	伝富雄丸山, 五島美術館
	B	同上	—	安満宮山(1号)
	5 A	三角縁対置式神獸鏡	—	佐味田宝塚
	B	同上	—	椿井大塚山(15号), 伝都祁野
	6	三角縁神人龍虎画像鏡	—	黒塚(8号)
	7 A	三角縁盤龍座画像帯鏡	—	伝帯解
	B	同上	—	湯迫車塚, 北山茶白山, 伝富雄丸山, 大岩山, 伝奈良
	8 A	三角縁盤龍鏡	—	池ノ内5号, 吉島, 万年山, 頼母子
	B	同上	—	藤崎, 雪野山
	C	同上	—	赤塚
	D	同上	—	和泉黄金塚, 椿井大塚山(35号), 黒塚(17号), 伝奥津社
E	同上	—	宮ノ洲	
F	同上	—	津ノ郷	
三角縁 神獸鏡	9~ (表2 参照)	三角縁二神二獸鏡 三角縁四神四獸鏡 三角縁三神三獸鏡	— — —	

※「目録番号」は奈良県立橿原考古学研究所他編「大古墳展」(2000年)の「三角縁神獸鏡目録」の番号である。

のから、はては三角縁すら持たない安満宮山古墳鏡までもが挙げられている。逆に、三角縁神獸鏡を語る上で欠かせない和泉黄金塚の景初3年鏡と福知山広峰14号墳の景初4年鏡は記載されていない。つまり、言葉として

銘文	目録番号
陳是作鏡	—
陳是作鏡	—
陳是作鏡	—
陳是作鏡	7
陳是作鏡	8
天王日月	9
吾作明鏡	11
吾作明鏡	30
吾作明鏡	29~30
吾作明鏡	29
吾作明鏡	28
—	100~101
吾作鏡	—
—	1
—	2
—	5
—	4
—	3
吾作明鏡	6
—	5~6

語られてはいるものの、この目録は「日本の古墳から出土する『三角縁神獸鏡』に関連する一連の鏡はみな『三角縁神獸鏡』という名称で取り扱う」という原則に無意識のうちに、かつ徹底はまったく欠いて従っているのである。つまり、大原則は無視されており、善意に解釈するとしても、鏡式より上位の統合概念(総称)的な扱いをされていると言える。この目録に限らず、従前の目録のほとんども暗黙のうちにこの原則に倣っている。これは、三角縁神獸鏡に関連する一連の鏡をまとめて一言で呼称することが何とも難しいことにも一因があろう。

しかし、鏡の名称の大原則は、決して原則のための原則ではない。言葉が正確に実体を表わさず、お互いの整合性を欠いたまま言葉だけによる論理展開が行われると、誰もが無意識のうちに、実体とはかけ離れた誤った方向に議論が進む恐れすら出てくる。その点を考慮してこの倭国にもたらされた特異な中国鏡群を、本論では「倭国向け中国鏡群」の名のもとに漏らさず取りまとめて、表1に示した用語で区別して取り扱いたい⁽³⁾。

はじめの三角縁を持たない3鏡(表1-1ABC)は、統合概念としては「模倣鏡」であり、鏡式名としては「模倣同向式神獸鏡」・「模倣盤龍鏡」となる。むしろ他鏡との対比でいえば「(三角縁を持たない)模倣鏡」が正確と言える。二つ目の「三角縁模倣鏡」(表1-2~8)

も統合概念で、鏡式名としては各種の神獸鏡や画像鏡・盤龍鏡などの模倣鏡が含まれる。三つ目の「三角縁神獸鏡」(表1-9, 表2)は統合概念(総称)であり、その概念内には神仙と獸形の数に応じて数多くの鏡式名称が設定

出来よう。「三角縁模倣鏡」の中の各種神獸鏡は、思想的意味合いを持った神獸鏡の文様を十中八九忠実に模倣しようとしたものであり、模倣の対象となった神獸鏡も特定できるし、その名称を正しく受け継いで「模倣」⁽⁴⁾を冠して名づける必要がある。一方、統合概念「三角縁神獸鏡」に含まれる鏡は、思想的意味を失った形ばかりの神仙と獸形の、これまた意味を見出しえない配列に特色がある。従って、意味性を含まない名称をあえて用いることが他鏡との識別のうえからも大変合理的となる。つまり、文様に意味性を持たないという「意味」を表示した名称である。また、ここには神獸鏡以外のものは含まれていない。

以下、この区分けに基づいて、個別の鏡について検討を加えていきたい。

2. 模倣鏡と三角縁模倣鏡

表1-1A・B, 2A1・2 同向式神獸鏡(A式)

1A・Bと2Aはいずれも同向式神獸鏡の模倣鏡であり、しかもいずれも「陳是作鏡」の銘を持つ関連性の強い鏡群である。なぜ模倣と言えるのかも含めて、文様の細部についてはかつて言及したが、要するに中国製の同向式神獸鏡の文様の配置を正確に理解しないままなんとかコピーしようと試みた点に特色がある⁽⁵⁾。細密で表現の難しい画文帯を持つものが1Aの和泉黄金塚鏡のみであり、しかもそれに「正始元年」ではなくその一年前の「景初3年」の紀年があり、逆に2A2の正始元年鏡にのみ同範鏡が見い出せることも、想定される物事の推移の順番として決して不自然ではない。

ただ、この1と2Aの文様は、決して単純な一列下に文様の変化が迎えられるものではない。先行するコピーが後のコピーの完全な手本とはなっていない。和泉黄金塚鏡⁽⁶⁾(図1)と正始元年鏡⁽⁷⁾(図2)には最下部の神仙のさらに下に、獸首と太鼓腹の獸の表現が見えるが、1Bと2A1の神原神社鏡⁽⁸⁾(図3)にはこれがない。また、最下部神仙の両脇にある棒状物に刻みのような線が見えるのもこの2鏡のみである。さらに、1Bの安満宮山5号鏡

(9)
 (図4)のみが、鈕側4か所の小円が突乳状の表現に代わる。また、鈕の両側の神仙の頭上の天蓋状の横棒の両側に細線を引く点は、細かい表現でありながら4鏡すべてに共通している。つまり、模倣の状況としては、逐一原鏡に立ち返ってのその都度のコピーであり、コピーされて出来上がった鏡を原鏡として次のコピーが行われたものではない。原鏡が2面存在した可能性は残るが、一面からのコピーでも充分あり得る様相と言える。

(10)
 この1・2Aの原鏡としては、今のところ根津美術館蔵鏡(図5)のような鏡が最も当てはまりそうに思われる。上述の細部の文様の手本として過不足がない。その模倣が繰り返されてゆく中で、表現が複雑で技術的に難しく、手間暇のかかる画文帯・半円方格帯が文様からはずされていったものと思われる。つまり、優先すべきであった事項は文様コピーの忠実性、高度な表現技術水準の発揮などではない他のもの、たとえば時間の制約・大量の生産といった別の要素であったと思われる。三角縁や鋸歯文・複波文は画像鏡からの借用であろうが、文様として決して精緻でも美的でもない。

2B

(11)
 一方、紀年を持たない2B(図6)は、笠松状表現と鈕左の神仙のみが横向きになる点が特徴的である。また、内区外周4か所の突乳が文様の邪魔になっている。割り付けとしては、まず4乳、続いて2つの笠松が優先的に描かれ、その後で同向式神獸鏡の文様をはめ込んだ可能性が高い。鈕右の神仙の頭上の天蓋表現が笠松に邪魔されている。さらに左上・右上の獣と最上部の伯牙弹琴形を含む神仙の表現は、最も原鏡に忠実に、正しいスペースを確保して表現される。鈕の最上部付近と併行して獣の胴体下部が横一線になるように描かれている。そのために、最後に描こうとした鈕左の神仙のスペースがなくなって、横向きに表現したと思われる。割り付けにしか意味のないものが、肝心の文様を理不尽にも毀損している。2Bも、2Aの紀年鏡群ではなく、間違いなく元の原鏡に立ち返って模倣している。陳氏銘は無く、作鏡レベル的には2Aの作者よりは技量的に優れている。

表1-3・同向式神獸鏡(B式)

同向式神獸鏡のBタイプで、宮ノ洲の1例のみ⁽¹²⁾(図7)が知られる。同向式神獸鏡のBタイプは、新古の区別があり、古式は文様を見る方向が鏡式名とは異なって2ないし4方向となる。また、尊古斎旧蔵鏡⁽¹³⁾(図8)など、古式には神仙を小さく多数描く例がある。宮ノ洲鏡は、新旧が入り交る不思議な文様をしている。内区を見る方向が基本的に1方向である点、内区外周に断面三角形で内側面に鋸歯文が入る文様帯(鋸歯文突帯)を描く点は京都石不動鏡⁽¹⁴⁾(図9)などのような新式のみに見える表現であるが、右上・左上の突乳をめぐる盤龍が頭の向きが逆になる。これは古式の表現である。また、神仙も小形に多数描かれて古式タイプである。鈕左の神仙の左上にある立ち姿の神仙の表現や、鈕右の神仙の右下に見える壺状の物体・最下部の神仙の下に見える亀の表現も、新式にはなく古式に例が見える。鈕右の神仙は、左とは異なって脇侍の動物がなく、その台座が屈折しつつ下に長く伸びて右下の獣を上から跨いでいる。他に例を見ない異例の表現である。

全体として見て、宮ノ洲鏡は何か1面の鏡の模倣をしたものとは考えられない。複数の、しかも新旧両タイプの同向式神獸鏡の文様の寄せ集めと理解するしかない不可思議な文様と言える。右側の笠松も含めて、製作した工人の製作意図とそこに至る思考過程をいささか計りかねる部分がある。

表1-4・環状乳神獸鏡

環状乳神獸鏡の模倣鏡で、2形式3面がある。全体の構成としてはかなり原鏡に忠実で、他鏡の文様の混入は認められない。⁽¹⁵⁾4A(図10)では環状乳の位置が内側(鈕側)に寄りすぎていて、獣の表現がくずれて、一匹の胴体の細長い龍の形からはかけ離れている。環状乳のそばにある、龍の肩・腰の翼状の表現があまりに目立ち過ぎになっている。環状乳自体の形態も原鏡とは異なり、突乳の先端を切り落として先を窪めたようなかなり上に突

出した形になる。原鏡はちょうどドーナツを置いたような平板な形をしていて、しかも環状の周囲は極細の二重線になっていてさらにその周囲に放射状の刻みの線が入る(図11)⁽¹⁶⁾。4にはこれがすべてない。また、鈕側の4つの小乳も随分と表現の邪魔になっている。

4B(図12)⁽¹⁷⁾は鈕際に高く大きい4突乳を先に描く。これに制限されて、獣の頭と首を極端に折り曲げて表現せざるを得なくなっており、しかもそのしわ寄せが神仙の右脇の侍獣の表現に及んでいる。この突乳へのこだわりは鏡に手慣れた工人なら避けるべき行為である。環状乳自体の表現はAに似るが、足と脚先の爪の表現が誇張されている。また、伯牙の弹琴模倣像が手の形を明瞭に示して区別して表現されている。また西王母模倣像と考えられる像では、左側の獣が右を向いて傘蓋の柄を口に銜えている。鏡では他に例を思いつかない異様の表現で、強いて挙げれば画像石の表現に近い。また、鈕側の有節重弧文の中にも4か所の小乳状の盛り上がり認められる。この工人はよほど文様の割り付けに自信がなかったとしか思えない。

4AとBは細部の表現が大きく異なる。同じ工人が1面の原鏡から別々のやり方で模倣を行ったという想定は成り立たないように思える。別の工人の作品とすべきであろう。

表1-5・対置式神獸鏡

対置式神獸鏡は、鄂城出土鏡(図13)⁽¹⁸⁾のように鈕を挟んで東王公と西王母が対置される。両側の獣は一部の例外を除いて東王公・西王母側を向いていて、体向が固定的に決められている。この獣の後ろ脚が向かい合って、神仙が座す台座になり、通常は2人の神仙が向かい合って描かれる。伯牙もここに入る。三角縁神獸鏡の4神4獣タイプや4神6獣タイプのような典型的な表現とはその点に決定的な違いがある。

5A(図14)⁽¹⁹⁾は獣の肩関節部分のみが特色的な環状乳形の表現になる。椿井大塚山鏡を始め何例か類例があるが、その場合は必ず腰関節の部分も環状

乳状になっていて、1体の獣に環状乳が必ず2つ表現される。神仙の両側が侍獣ではなく侍神になる類例や、神仙の下部に小動物が入る例は、さらに例が乏しい。この部分は可能性としては、対置式の鏡の模倣というよりも1・2・3あたりの同向式神獸鏡の表現技法を持ち込んで援用した可能性の方がありそうに思われる。それ以外はかなり忠実な模倣と言える。

⁽²⁰⁾5B(図15)は神仙右側の獣の一つの顔が完全に側面形になり、しかも縦方向の棒状物を口に咥えている。これはむしろ同向式神獸鏡の右下の獣の表現と一致している(図5参照)。5A・Bともに外周側に4つの小乳があるが、これは対置式では例を見たことがない。むしろ同向式の小円あたりが祖形ではないかと思われ、もしそう見て良ければ、1・2・3などの模倣のほうが5よりも先行していて、そこからいくつかの文様が対置式の模倣の中に持ち込まれたことが考えられよう。5Bも全体の構成はかなり忠実な模倣の部類と言える。

表1-6・画像鏡

⁽²¹⁾黒塚28号鏡(図16)は神人龍虎画像鏡の模倣鏡である。東王公・西王母の両側の神仙が羽人に近い姿となる。これは西求女塚⁽²²⁾7号鏡(図17)の表現に近い。両側の羽人が東王公・西王母のほうに両手を差しのべる形も良く似る。また、地文として蕨手状を含む細線が無数に入る点も同一である。古鏡図録収載鏡⁽²³⁾(図18)は羽人の表現と、4乳とその周辺の珠点円の表現に近い。龍虎の表現は個人蔵鏡(図19)に近い。この西求塚鏡以下3面の鏡の諸要素をすべて一つにまとめて持つような神人龍虎画像鏡は想定できず、文様的には寄せ集めと考える他ない。この鏡も鈕側の4乳がすべての周囲の文様、特に龍の表現の邪魔になっている。よほど重要な文様要素と思われるが、ここまでこの小乳に拘る理由が本当に分からない。

表1-7・盤龍座獸帯画像鏡

⁽²⁴⁾盤龍座獸帯画像鏡の模倣鏡である。7A(図20)は盤龍座と画像帯のスペー

ス配分も原鏡に近く、盤龍座の占めるスペースが狭い。龍虎座は4頭式で、2頭の脚先を両側から花の蕾のように丸める特色がある。これは陝西長安出土鏡⁽²⁵⁾(図21)や扶風県博物館蔵鏡・岐山県博物館蔵鏡⁽²⁶⁾⁽²⁷⁾などにも見られるもので、原鏡を忠実に模したものであろう。内区は6分割され、神仙2・龍・鳳凰と羽人・神鹿と獸の組み合わせが2である。盤龍座のものでは今のところ完全に同一の組み合わせの例を見つけれないが、画像帯鏡の文様としては異例のものとは思えない、あって不思議のない通有のものである。細かい表現自体もかなり忠実な模倣表現と言える。

⁽²⁸⁾7B(図22)は7Aと比べると、盤龍座の表現がかなり大きなスペースを占め、ほとんど盤龍鏡と画像帯鏡の合体作というに近い。その事自体がすでに異様と言える。盤龍座自体も乳で4分され、3頭とほかに獸形が1つ入る。盤龍鏡には、このように他の図像を加える例も多いが、似た形の例を知らない。

画像帯は8分割される。神仙・騎馬人物・車馬などは通有のもので、ボストン美術館蔵鏡⁽²⁹⁾(図23)のような車馬や騎馬像が複数ある画像帯鏡が模倣対象と思われる。一方、笠松と車輪、車輪と鳥魚、獸頭と車馬の車体部分などはかなり特異な文様と言える。この車輪は盤龍鏡でも良く似た車輪状のものが入る例がかなりあり、その模倣とも受け取れる。獸頭は、鏡の文様では近似した例に思い至らない。いずれにしても、原鏡の忠実な模倣作ではなく、文様が統一的な意味をなしておらず、改変・創作の部分も相当に含まれた作品である。

表1-1C 盤龍鏡

盤龍鏡の模倣作は三角縁のものも含めて種類が多い。いずれも4頭式であるが、この4頭式は盤龍鏡のなかでは2頭式に比べて類例が極めて少ない。

⁽³⁰⁾1C(図24)は景初4年銘が入る。本来はもっと前で述べるべき鏡ではあるが、次の8との関係からここまで下げて述べる。これも4頭式で、小林行

雄氏も解説される通り、片方の2頭の獣の頭の角を入れるべきスペースがなくなっている。この2頭の間にある、細線表現の花蕾の断面状の文様も類例(図25)⁽³²⁾があり、原鏡からの忠実な写しであろう。ところがよく見ると、この花蕾文の下の突乳は、ほかの3乳と異なって位置が鈕側に幾分寄っていて、明らかに花蕾文を描くために位置をずらしてスペースを空けたことがうかがえる。常に突乳が先に描かれて他の文様の邪魔になる他鏡とは異なり、文様が突乳の位置を制約している。ほかの三角縁模倣鏡の突乳がかなり杓子定規に位置取りされているのとは、これだけが明らかに様相が異なっている。頭の表現自体は後述の8と比較しても最も稚拙である。胴体の表現も最も粗雑でこなれていない。

この鏡は盤龍鏡の模倣鏡の中でも最も習熟した文様になっていない。その点から考えて時期的に他の鏡に先行して製作されたのではないかと考える。三角縁ではなく斜縁とみなされて、「三角縁神獸鏡」のリストから除外されたりするが、一連の考察に必要な鏡をこれだけ除外することは不適切である。1Bの安満宮山鏡などと並んで内区の突乳・三角縁などの外区の形の表現がまだ固定化・定式化されていない初現期の様相を示す鏡とみなす事が妥当である。直径が小さいのもそのためと思われる。銘の景初4年については種々の議論があるが、今述べた文様の特色と併せてこの銘も解釈することは充分可能なのではなからうか。景初3年・正始元年の2年の間のいずれかの段階での、まだ試作品的な作鏡としてかんがえるのにふさわしい様相を示しているのではなからうか。

表1-8・盤龍鏡

神仙像を持つ2タイプ(A・B)⁽³³⁾⁽³⁴⁾と神仙像を持たない4タイプ(C・D・E・F)⁽³⁶⁾⁽³⁷⁾⁽³⁸⁾に分かれる。1Cとの関係は同向式神獸鏡の1A・Bと2との関係と同一である。神仙を内区に入れる盤龍鏡は根津美術館蔵鏡(図27)⁽³⁹⁾しか例がなく、もしこの点も忠実なコピーだとすると、原鏡は相当に希少なタイプの盤龍鏡と言える。むしろ、神仙像の挿入はコピーではなく、東京国

⁽⁴⁰⁾立博物館蔵鏡(図28)のような同向式神獸鏡の神仙からの借用で、工人の工夫であろう。内区の外周を鋸歯文突帯で区切る手法はA～Fに共通するが、盤龍鏡では例を見ないもので、他の神獸鏡などの模倣鏡と揃えたやり方を採用したものであろう。

神仙像の無い4タイプ(C・D・E・F)は、文様的にはさして大きな特色を示さない。神仙像を入れない代わりに、細かな動物文様を持つが、これは盤龍鏡の一つの手癖で、忠実な模倣の内かと考える。Cの羽根を広げた朱雀形は先述の根津美術館鏡(図27)にも見えるもので、重列神獸鏡の朱雀とも共通点を持つ。DとFに銘文がなく、かわりに複波文に置き換えている点がむしろ目を引く。銘のあるEはこれとは逆というか、銘帯を蒲鉾状に軽く盛り上げて、「四夷服多賀国家……」で始まる盤龍鏡に多い銘を入れる。ただしこの鏡が製作順が最も古く、原鏡に近いと言い切れるほどの文様の違いは指摘できない。

以上、模倣鏡・三角縁模倣鏡について概括した。概観してみてもやはり痛感されるのは、「陳是作鏡」銘を持つ鏡群が、際立って文様表現が拙劣なことがある。ではこの陳氏が技術レベルが劣る工人なのかというと、後述の11・13などのように他と遜色のない「陳氏作鏡」銘の鏡も存在する。となれば、この拙劣さはむしろ外的要因によるもので、拙速を強いられて蒼惶のうちに製作した結果の可能性もある。つまり、青銅鏡製作の常識を外れて、あまりにも短期間に大量の作鏡を強いられた、その最も最初の段階のある種の混乱の様相と見ては如何であろうか。

いずれの鏡もこれ一面からというほどの瓜二つの原鏡を指摘出来なかった。むしろ、あえてそれを避けているかのように、何面かの原鏡の文様を寄せ集めているかのような印象を受ける。また、多くの鏡に笠松形の文様が含まれていた。この文様は、中国鏡では完全に同一の文様を指摘出来ない。可能性がありそうなものは以下の2つである。1つはユーモルフォポロス旧蔵の大英博物館蔵鏡(図29)で東王公・西王母の両脇の侍神が扱う、棒状物の先に房状の物が複数ついたもの(節か)である。但し、これは極め

て類例の少ない文様で、ポピュラーなものとは言い難い。また、仮にコピーされたとしても、椿井大塚山12号鏡⁽⁴²⁾(図30)のように通常の笠松とは些か異なる表現につながったであろう。また、桜井市金ヶ崎古墳出土鏡⁽⁴³⁾(図31)では笠松形と節形が共存している。

2つ目は、同じ画像鏡で東王公・西王母の両脇に居並ぶ羽人の表現である⁽⁴⁴⁾(図32)。画像鏡では頻出する文様であるが、かなりデフォルメされた表現になっており、意味が理解できていないと人の形の表現と分からない程のものである。笠松表現の頂上部にある算盤玉のような張り出し、笠松を埋める密集線もこの文様の変形とすれば理解できる。後者の可能性を重く見ておきたい。

神戸市西求女塚3号鏡⁽⁴⁵⁾(図33)や鳥取普段寺1号墳鏡⁽⁴⁶⁾などでは笠松の最下部にある小円はドーナツ状となり刻線が入る。この形はグラハム氏蔵鏡⁽⁴⁷⁾(図34)など同向式神獸鏡で内区外周や鈕座外周(つまり内区内周)に例が見える。特に最下部のものは台座の線を支えるような形に使われており、ヒントになったのではなからうか。そう考えると、大分赤塚古墳⁽⁴⁸⁾(図35)などのように内区を区切る大きな4乳がこのドーナツ状の座を持ち、その上に笠松がのる形のものがあることも、製作工人の思考過程を推し測る上でも理解しやすいものではなからうか。1の景初・正始の年号鏡の原鏡となった同向式神獸鏡にそのヒントとなるものがあつた可能性も充分あり得よう。

3. 三角縁神獸鏡に見える他鏡からの模倣

第2章では、原鏡の文様を大枠として忠実に模した一群である三角縁模倣鏡について記述した。次に本章では中国鏡の文様を写しながらも、それが文様全体では一部分にとどまる三角縁神獸鏡について述べたい(表2)。

三角縁神獸鏡の主文様は、神仙と獣のほとんど無作為の組み合わせであるが、すでにその表現自体も、神仙と獣の組み合わせ方法も類型化して、中国鏡のような意味をなしていない。数多くの型式があるということは定

まった定式が無いということである。そのために、文様に思想的な表現上の強い縛りがなくなっており、文様全体に一貫性が欠如し、思想的意味も異なるはずの他鏡式の文様が無関係に組み合わせられてくる例が認められる。筆者の確認した何例かについて記したい。

表2-9・10・11 画像鏡の模倣

⁽⁴⁹⁾ 9A(図36)は通常の獣の代わりに神人車馬画像鏡に見られるような車馬を描く。車体をわずかに斜めから描いて、車箱の前面や二つの車輪を見せる点などは、よくコピーされている。但し、車箱と馬を結ぶ手綱が見当たらない。三山冠を被る神仙の右横に前半身だけが見える獣は、頭が真横から描かれる特異形で、表現としては西晋の太康年間(280~289)の紀年鏡(図37)の表現に最も近い。⁽⁵⁰⁾この鏡の製作年代を推し測る一つの目安となし得よう。

⁽⁵¹⁾ 9B(図38)では、馬が3頭しかおらず、車と馬の間に御者のような姿の羽人を描く。これは例を他に見えないもので、改変であろう。山岳とされる奇妙な文様は、紹興古鏡聚英収載鏡(図39)のような、車馬の重なるの誇張的な表現のコピーであろう。一方、⁽⁵²⁾9C(図40)は同じく車があるが、牽引する馬は描かれておらず、隣には騎馬の人物がいる。通常の画像鏡ではあり得ない表現で、7で述べたような画像帯鏡の文様の写しと見るほうが妥当かもしれない。

⁽⁵⁴⁾ 10A(図41)・⁽⁵⁵⁾ B・⁽⁵⁶⁾ Cは、獣の表現が神人龍虎画像鏡の龍虎の写しになる。龍と虎の描きわけが明瞭である。胴体の縞状文様も真似たものである。但し、神仙の方は系統が異なる。いずれも蕨手状の羽毛の表現が特色的な独尊像となる。神獸鏡でも特に対置式神獸鏡に多く見られるもので、神人龍虎画像鏡の侍神・侍臣や侍女を多く伴う東王公・西王母の表現とは異なっている。

11は画像鏡に見える傍題を入れる例である。類例は表2掲載品以外にも数多い。⁽⁵⁷⁾11Aには「王父」・「仙」が、⁽⁵⁸⁾11B(図42)には「東王夫」・「西

表2 三角縁神獸鏡に見える他鏡からの模倣

模倣対象鏡	No.	鏡式	出土古墳等
神人車馬画像鏡	9A	三角縁二神二獸鏡	藤崎, 湯迫車塚, 甲斐銚子塚, 伝三本木, 個人蔵
	B	三角縁三神三獸鏡	湯迫車塚, 佐味田宝塚
	C	三角縁三神三獸鏡	大岩山
神人龍虎画像鏡	10A	三角縁二神二獸鏡	新山, 京都東車塚, 個人蔵, 伝熊本
	B	三角縁二神二獸鏡	(クリスティーズ扱い)
	C	三角縁二神二獸鏡	松林山 (14Bと同一)
画像鏡	11A	三角縁四神四獸鏡	黒塚(6号), 伝三本木
	B	三角縁四神四獸鏡	新山, 椿井大塚山
	C	三角縁四神四獸鏡	黒塚(7号), 西山2号, 伝岡山 (13Bと同一)
画文帯神獸鏡	12A	三角縁六神三獸鏡	黒塚(14号), 桜井茶臼山, 東天神18号
	B	三角縁五神四獸鏡	椿井大塚山(18号), 伝富雄丸山, 那河八幡, 湯迫車塚, フリア美術館
三段式神仙鏡	13A	三角縁五神四獸鏡	黒塚(5号), 前橋天神山, 桜井茶臼山
	B	三角縁四神四獸鏡	黒塚(7号), 西山2号, 伝岡山 (11Cと同一)
	C	三角縁三神三獸鏡	真名井, 新山, 蟹沢, 伝京都
	D	三角縁三神三獸鏡	城の山, 円照寺墓山1号
方銘四獸鏡 盤龍座獸帶鏡	14A	三角縁四神四獸鏡	黒塚(15号), 佐味田宝塚
	B	三角縁二神二獸鏡	松林山 (10Cと同一)
	C	三角縁四神四獸鏡	安満宮山(3号), 安田, 伝香登
	D	三角縁二神二獸鏡	香住ヶ丘, 桜井金ヶ崎
	E	三角縁三神三獸鏡	甲斐大丸山, 寺谷銚子塚, 坂尻
	F	三角縁三神四獸鏡	枚方万年山, 蓮尺茶臼山
	G	三角縁二神四獸鏡	伝四国
13・14の混合	15A	三角縁二神二獸鏡	椿井大塚山(25号), 百々池
	B	三角縁四神四獸鏡	岐阜岩田
	C	三角縁四神四獸鏡	椿井大塚山(12号), 黒塚(28号), 石切神社
	D	三角縁四神四獸鏡	潮崎山, 鳥取国分寺
	E	三角縁二神二獸鏡	沖ノ島(18号), 伝桑名, 宮ノ洲

※「目録番号」は奈良県立橿原考古学研究所他編『大古墳展』(2000年)の「三角縁神獸鏡目録」の番号である。

王母」がある。これらは、獸帯鏡から画像鏡が受け継いだ手法であり、神獸鏡では用いられない。

以上、9・10・11は画像鏡の文様の部分模倣というべきものであり、しかも文様の主要部分である内区にこれが組み込まれている。他鏡ではこのように内区に他の鏡の中心的文様が組み込んで用いられる例を知らない。それは、一つには画像鏡の内区の文様配置や個々の文様自体の大きさが、画文帯神獸鏡などよりもはるかに三角縁神獸鏡と近く、部分模倣をして組み込みやすかったことが挙げられよう。そもそも、三角縁神獸鏡の総体的なモデルは三角縁画像鏡である

銘文	目録番号
陳氏作鏡	13
陳氏作鏡	14
陳氏作鏡	15
尚方作鏡	100
尚方作鏡	—
吾作明鏡	101
陳是作鏡	52
吾作明鏡	32
陳是作鏡	33
—	55
—	56
天王日月	57
陳是作鏡	33
—	114
—	115
天王日月吉	60
吾作明鏡	101
天王日月	48
天王日月	95
天王日月	110
—	118
天王日月	—
天王日月	92
天王日月	—
天王日月	43
天王日月	47
天王日月	91

表2-12・画文帯神獸鏡の模倣

12は、鋸齒文突帯の外周に、画文帯神獸鏡の画文帯の模倣文様が入る。12A(図43)は、北斗車から反時計回りに星辰・六飛龍・星辰・獸2頭・星辰・羽根を広げた鳥・星辰・龜・捧日月象像と続く。12B(図44)は時計回りに、北斗車・星辰・六飛龍・星辰・羽根を広げた鳥・星辰・獸1ないし2頭・星辰・捧日月象像となる。両者は文様要素が大変良く似ている。画文帯を眺めた場合、仮に意味を理解できなくとも、北斗車と六飛龍は最も目立つ文様要素であり、これが両者ともに含まれているのはうなづける。これに対して捧日月象像は意味がよく理解できていなければ、印象的な図像とは言い難く、1つに減らされることもある意味自然なことと言えるかもしれない。両者とも北斗車と六飛龍の間に星辰が入る。これは画文帯の表現としてはかなりの少数派で、もしその点までもが忠実にコピーされているとすれば、現存する鏡

のなかで原鏡候補を相当に絞り込める。もともと画文帯は正始元年には一旦はずされた文様であった。作鏡の事情には明らかな変化が見て取れる。

表2-13 三段式神仙鏡の模倣

⁽⁶²⁾13A(図45)も12と同様に、内区外周の鋸齒文突帯の外側に、細かい浮き彫り表現の文様帯がある。但し、これは12のような画文帯のコピーではない。4か所に「天王日月」銘を入れる方格があり、これで区切られた4か所に、捧日月象像と星辰、龍と羽根を広げた鳥、羽根を広げた鳥と星辰、獸2頭が入る。獸2頭のみ体向が右向きで反時計回りの表現である。画文帯に近似して見えるが、画文帯の中心となる北斗車と六飛龍がない。これは三段式神仙鏡に近似例が見える。陝西・乾県出土鏡⁽⁶³⁾(図46)は、捧日月象像・獸・星辰・羽根を広げた鳥2羽・捧日月象像・獸2頭・星辰・羽根を広げた鳥の順で、時計回りに巡る。根津美術館蔵鏡⁽⁶⁴⁾(図47)は、捧日月象像・星辰・ウサギ2羽・羽根を広げた鳥2羽・星辰・獸4頭の順で、これも時計回りに巡る。いずれも北斗車と六飛龍がなく、捧日月象像・星辰と動物・鳥のみで構成される点が共通している。

13B・C・Dは、同じ細かい浮き彫り文様ながら、方格や半円・環状乳で細かく区切られる。⁽⁶⁵⁾13B(図48)には合計16の文様が入り、捧日月象像1ないし2のほか、象や魚などが見える。⁽⁶⁶⁾13Cには捧日月象像は見えないが、⁽⁶⁷⁾双魚・象・羽根を広げた鳥・蟾蜍などが見える。13Dには、⁽⁶⁷⁾双魚2・象・羽根を広げた鳥・蟾蜍が見える。これは、同じ三段式神仙鏡でも、乾県出土鏡などとは別タイプの、方格や半円などで文様帯を仕切るタイプに類似例がある。⁽⁶⁸⁾五島美術館蔵鏡(図49)は、捧日月象像2・双魚がある。澁秋館吉金図収載鏡⁽⁶⁹⁾(図50)には、捧日月象像2のほか、⁽⁷⁰⁾双魚・象・羽根を広げた鳥・蟾蜍・首を交差させた双鳥(首交差鳥)などが見える。捧日月象像の⁽⁷¹⁾見えないものとしては、⁽⁷⁰⁾西安市壩橋出土鏡や⁽⁷¹⁾上海博物館蔵鏡に⁽⁷¹⁾双魚・首交差鳥・羽根を広げた鳥が見える。B・C・Dは、北斗車・六飛龍ばかりか星辰も描かれていない点が大きな特色となる。一方で、画文帯には見られ

なかった魚・蟾蜍・象・首交差鳥などが加わる点が共通している。この両者(AとB・C・D)はまったく似て非なるタイプと言える。

従って、三角縁神獸鏡の制作者は、少なくとも2タイプの三段式神仙鏡を手本として認識していたこととなろう。それならばむしろ三角縁模倣鏡にその直接の模倣作があっても良さそうに感じられる。

表2-14 方銘四獸鏡・盤龍座獸帶鏡の模倣

13によく似たものながら、文様内容に違いがある一群が存在する。いずれも鋸歯文突帯の外周という場所は同一で、方格と乳で仕切って文様を入れるスタイルも似ている。但し、文様内容に大きな違いがある。14A(図51)では、四神の内の玄武を描く。また、特色的な図像として、横方向から見るように描かれた、兎のように耳が長く片足を上げて手に棒状物を持った羽人状の人物(以下では、兎神仙と呼びたい)が入る。他は羽根を広げた鳥(鳳凰?)、一對の向かい合う双鳥・獣など13でも見られた図像である。⁽⁷²⁾14B(図52)には玄武のほか双魚・蟾蜍も見える。14C・D・E・Fにも玄武・兎神仙・首交差鳥、⁽⁷³⁾14Gにも玄武と魚が、⁽⁷⁴⁾14Hにも玄武が見える。⁽⁷⁵⁾⁽⁷⁶⁾⁽⁷⁷⁾⁽⁷⁸⁾⁽⁷⁹⁾

13では見られなかった玄武は、方銘四獸鏡や盤龍座獸帶鏡の一部に文様配置に近いタイプのものに見られる文様である。⁽⁸⁰⁾プリンストン大学蔵鏡(図53)は玄武・双魚・象・羽根を広げた鳥、四川昭化県鏡には象・羽根を広げた鳥、⁽⁸¹⁾河北省景県鏡(踏み返し)には玄武・象・羽根を広げた鳥、四川什邡市鏡(破片)にも玄武、⁽⁸²⁾巖窟蔵鏡収載鏡(図54)にも玄武と羽根を広げた鳥がある。これらはもともとを糾せば獸帶鏡の文様に僅かながら例が見え、獸帶画像鏡やその他の鏡に受け継がれたもので、それらでは四神の内て玄武と鳳凰を残し、これに様々な文様が組み合わせられる。ストックホルム遠東博物館蔵の浮彫式獸帶鏡(図55)は玄武・鳳凰の外に首交差鳥がある。湖北省襄樊市鏡⁽⁸³⁾は一對の向かい合う双鳥がある。一方、筆者が兎神仙と名付けた図柄は今のところ方銘四獸鏡には類例が見られず、盤龍座獸帶鏡や盤龍鏡の外区に玉兎搗葉文として見えるものに形が酷似している⁽⁸⁴⁾(図56)。類⁽⁸⁵⁾⁽⁸⁶⁾

例は極めて少ないものであるが、文様を横方向から見るように縦長に表現する事も共通している。魚・象・双魚・蟾蜍などもこの文様と共存する文様である。また獣帯鏡では内区には玄武・羽根を広げた形の鳳凰もあり、文様の組み合わせが極めて近い。盤龍座獣帯鏡は三角縁模倣鏡でも模倣対象となっていたことが想起される。

表2-15(13・14の混合)

13・14で述べたとおり、中国鏡には、捧日月象像と玄武を組み合わせた文様が今のところ見い出せない。これは理由のあることで、玄武は方格規矩四神鏡・獣帯鏡から続くある意味古い文様であり、一方の捧日月象像は神獣鏡の画文帯の中に初めて登場する新しい文様だからである。両者は系統が違う。ところが、三角縁神獣鏡の中には、両者が併存している例がかなり見い出せる⁽⁸⁷⁾。玄武・捧日月象像の両者が共存するほかに、15A(図57)には兎神仙⁽⁸⁸⁾、15Bには首交差鳥⁽⁸⁹⁾、15C(図58)には鳳凰・首交差鳥と兎神仙⁽⁹⁰⁾、15Dには捧日月象像が2つと鳳凰形に羽根を広げた鳥が4か所に見える⁽⁹¹⁾。15E(図59)には兎神仙と一対の向かい合う鳥がある。明らかに両者の文様が混淆している状況と言える。三角縁神獣鏡の制作者に文様の細かい意味が理解できていない以上、随意に文様を選択すれば、このような状況が多く出現することは当然のことで、特に異とするには当たらない。つまり、選択の仕方によって、我々にはそれが13・14で述べる鏡となり、15で述べる鏡となったりして見えるということである。このような選択が行われること自体が、中国鏡の在り方としては異様であることを強く認識する必要がある。

以上、三角縁神獣鏡の文様に見える、中国鏡からの文様の部分コピーについてまとめてみた⁽⁹²⁾。最も注目すべきは、やはり13と14であろう。三段式神仙鏡は現状では出土地点が陝西省と四川省に大きく偏りが認められる。また、方銘四獣鏡も同様に陝西省に出土が偏る。まだ出土例が少ない段階

ではあるが、もしこの傾向が将来的にも変化がなければ、さほど大量に製作されたとは考えられない鏡群であるだけに、三角縁神獸鏡の性格・工人の素性を推察する上で興味深い事実となろう。

かつて福山敏男氏が論じられたように、景初3年・正始元年の紀年銘では、作者の陳氏は「本自京師杜地命出」(陳氏はもと京師の杜の地から命によって出仕した)とされている。⁽⁹³⁾この長安の杜県(杜陵県)はまさに今の陝西省に当たる土地である。その地出自の青銅器の製作工人である陳氏は、仮にももとの専門分野としては鏡の製作に携わってはいない工人であったとしても、コピー元として2種以上の三段式神仙鏡ほかを入手する手立ては充分あったであろう。陳氏は景初元年ごろから魏朝の命令によって洛陽で銅鑄の事業に加わっている。景初3年初めにその事業が打ち切られて以後、陳氏が何処に所在していたかは定かではないが、三角縁神獸鏡製作を請け負った時点ではむしろ長安に戻っていた可能性もある。13・14に限らず、三角縁模倣鏡・三角縁神獸鏡に見える他鏡の要素はかなり幅広い。極めて単純に計算しても、10種の鏡で20タイプ程度は認識している必要がある。それぐらいがなければこれらの鏡は製作出来ない。これだけの鏡種をコピー元の鏡として短期間に集められる場所が自ずと限られることは言うまでもない。その場所としてまず挙げられるのは、洛陽・長安の2か所であろう。

4. 王茂元「奏吐蕃族交馬事宜状」について

2011年に、山口博氏の見い出された『欽定全唐文』巻684に関する記事が、三角縁神獸鏡に関連するものとして報じられた。⁽⁹⁴⁾未だ山口氏本人の論を過眼していない状況であり、本来は氏の論を待つべきものであるが、極めて重要な資料であることは確実なので、先行して意見を述べることをぜひ寛恕されたい。

『全唐文』は清朝内府に保存されていた資料にもとづいて、唐代の人物

三千四十二人の文を集成したものである。嘉慶19年(1814)の勅命による編纂である。王茂元は『旧唐書』巻152・『新唐書』巻170に伝があり、9世紀前半の人である。チベットが下賜品として馬を求めてきたことに対してチベットを優遇する事を可とすべき意見を具申したものである。その事自体は直接日本に関わるものではないが、過去に朝貢国を厚遇した例を引く中に、「昔魏は倭国に酬いるに銅鏡の鉗文を止め、漢は单于に遺るに犀毘・綺裕を過たず。」という記述が見える。

前漢の文帝が匈奴の单于に対して下賜した品目に「黄金具帶一、黄金犀毗一」という記載が『漢書』匈奴伝に見える。この犀毗が匈奴が自らが作りえないものを漢朝に言わば強請った特注の帯金具であったことについては、すでに町田章氏が論じている通りである⁽⁹⁵⁾。犀毗と並ぶもう一つの綺裕は染織品であるが、『匈奴伝』には見えない。王茂元は別系統の資料ないしは漢書に採用されなかった原資料を見ていることが確実である。一方、倭国の記事は過去の厚遇の具体例2例の内に漢書の記事と並べて引用されており、『三国志』東夷伝にはまったく見えないものながら、軽視できない。その厚遇は、「銅鏡の鉗文を止める」こととされている。魏朝からみて、「鉗文を止めた」銅鏡を倭国に与えることが厚遇と呼べるほどのことであり、倭国にとってももちろん望みを叶えてもらえて感謝すべき事柄であったのである。東夷伝の記事でも、魏朝が倭国に下賜した銅鏡百枚は、朝貢品に対する通常の回賜品ではなく、魏朝からの特別の恩寵に基づく贈与品であったことが記される。倭国側からのたつての希望が関わっていた可能性が大である。

では、「銅鏡の鉗文を止める」とは具体的にはどのようなことであつたろうか。『説文』では、鉗は「くびかせ」が原義で、鉄で作られた拘束具を意味とする。『通志編』では「鉗勒」で押さえつけて自由にさせないという派生的意味を持つ。漢代以降の中国鏡の文様は思想の産物であり、思想の図像的表現であるという基本的性格を有する。従って、「鉗文を止める」は思想の忠実な表現であることを止める、鏡の文様にある首かせのよ

うな強い思想的縛りを外すという意味となろう。

では、鉗文を止めることによって具体的にはどのような鏡が出来上がったのであろうか。日本の前期古墳から出土する中国鏡の中にこれに該当する鏡は見え出せるであろうか。筆者定義の三角縁神獸鏡以外には候補に出来る鏡が他に想定できない。他の鏡はいずれも「鉗文に倣って」おり、中国でも使用・出土されている鏡ばかりである。模倣神獸鏡・三角縁模倣鏡も鉗文に倣おうとした鏡であって、鉗文を止めた鏡とは到底言えない。ひとり三角縁神獸鏡のみが、鉗文をやめればまさにこのようになるであろうと想定できる様相を呈している。類型的な神仙と獣の不定形な組み合わせは、この文様が形ばかりのものであり、意味を消失していることを示している。多くの形式に分かれるということは定まった形式つまり「鉗文」がないということの意味する。三角縁神獸鏡の「型式」なるものは「型式」というよりはむしろ随意的な文様の「組み合わせ」と言うに近い。中国の神獸鏡は決してこうはならない。第3章で詳述したように、これに別系統の思想に由来する文様までもが組み込まれてくるのは、言ってみれば「公認」のことだったわけである。

現在知られる三角縁模倣鏡の出土枚数は、50枚程度であり、これに模倣の対象となった鏡を合わせると、東夷伝に記される銅鏡の枚数100枚の現在の出土数としてふさわしい。卑弥呼が景初3年・正始元年の最初の遣使で得た鏡は、まずはこの鏡群であった可能性が考えられる。とすれば、三角縁神獸鏡、つまり鉗文を止めた鏡は、以前の遣使で与えられた鏡を持ち帰って「使用」してみた結果から浮かび上がってきたさらなる要望に応えたものとするのが最もふさわしい⁽⁹⁶⁾。それは魏朝側では予想できないような理解できないような「要望」であり、それゆえにこそ記録にも残されるような「厚遇」として伝えられることとなったと考えられよう。

注

- (1) この点で田中琢氏は正しい認識を保有していたが、残念ながらその具体的

- な研究を行うだけの知識と能力に欠けていた。後継して研究を進めるものもついに出来なかった。田中琢「三角縁神獸鏡のイコノグラフィー」『古鏡』（日本の美術176）（1981年）60～64頁。このことは、和泉黄金塚の景初3年鏡などの文様がコピーされたものであることを、筆者が1998年に指摘するまで、誰も理解していなかったことでも明白である。註（5）西村論文参照。
- （2） 奈良県立橿原考古学研究所付属博物館ほか『大古墳展』（2000年）248～254頁
- （3） たとえば、「三角縁神獸鏡には紀年鏡がある。」という命題は、筆者の用語法では誤りとなる。紀年鏡は模倣鏡と三角縁模倣鏡にある。
- （4） 犬山市東之宮古墳出土の同向（重列）式二神二獸鏡はいわゆる三角縁神獸鏡ではない。熱田神宮宝物館ほか『愛知の古鏡展』（1976年）図版5。大阪府立近つ飛鳥博物館『鏡の時代—銅鏡百枚』（1995年）56頁図版77。日・中に藏品がある。後藤守一『古鏡聚英』（1942年）図版49-4、『文博』2004年第4期34頁図5。棒状物を除いた形の同向式はさらに多くの例がある。『考古』1957年第1期、『梅原考古資料 朝鮮之部』NO. 883, 小窪和博『古鏡の美』（1987年）図51, 『小校経閣金文拓本』巻15-53葉右下, Sotheby, s(London) 『Fine Chinese Ceramics and Works of Art』（1994年6月）図版31。この犬山鏡の問題は、いわゆる三角縁神獸鏡をどのような鏡と定義するかという根本問題に関わるものであり、忽せに出来ない。
- （5） 西村俊範「写された神仙世界」『月刊しにか』1998年2月号
- （6） 小学館『世界美術大全集・東洋編3—三國南北朝』（2000年）356頁図版287
- （7） 神戸市立博物館カタログ『卑弥呼の鏡展』（1988年）図版6
- （8） 註（7）前掲カタログ、図版2
- （9） 高槻市教育委員会『安満宮山古墳』（高槻市文化財調査報告21）（2000年）図版29。なお、中国製の画文帯・半円方形帯神獸鏡では、半円方形帯と外区の境界は二重の一段高い突線帯となる。安満鏡はそれをまねていない。
- （10） 村上英二『創業120周年記念 中国古鏡展（村上英二コレクション）』（2001年）図版35
- （11） 京都大学文学部考古学研究室『椿井大塚山古墳と三角縁神獸鏡』（1989年）図版8, 註（2）前掲カタログ76頁上
- （12） 弘津史文（山口高等学校歴史資料室）『防長考古資料写真集』第1集（1924年）、後藤守一『古鏡聚英』上（1942年）図版65-2
- （13） 黄濬『尊古齋古鏡集景』（1990年）73頁
- （14） 京都府立山城郷土資料館ほか『鏡と古墳—景初四年鏡と芝が原古墳』（1987年）図版137, 註（2）前掲カタログ102頁
- （15） 田中琢『古鏡』（日本の美術178）（1981年）第96図、五島美術館『前漢から元時代の紀年鏡』（1992年）参考7、『奈良市史』考古篇（1968年）図版13, 天

- 理大学附属天理参考館『古代中国の鏡—鏡のなかの神がみ』図版58
- (16) A. Bulling 『The Decoration of Mirrors of the Han Period』(1959年)PL. 76
- (17) 註(9)前掲書, 図版21・22
- (18) 湖北省博物館ほか『鄂城漢三国六朝銅鏡』(1986年)図版103
- (19) 梅原末治『佐味田及新山古墳研究』(1920年)図版6下
- (20) 註(11)前掲カタログ, 図版1
- (21) 奈良県立橿原考古学研究所『黒塚古墳調査概報』(1999年)図版47, 註(2)前掲カタログ, 87頁
- (22) 神戸市教育委員会『西求女塚古墳第5次・第7次発掘調査概報』(1995年)41頁図75, 同前カタログ『青銅鏡—卑弥呼から浮世絵まで』(1995年)図版36, 同文様のものに大阪府立弥生文化博物館蔵鏡がある。大阪府立弥生文化博物館『仙界伝説—卑弥呼の求めた世界』(1999年)24頁図版64
- (23) 羅振玉『古鏡図録』卷中—19右, 孔祥星『中国銅鏡図典』(1992年)442頁
- (24) 『奈良市史』考古篇(1968年)図版57
- (25) 陝西省文物管理委員会「長安県三里村東漢墓葬発掘簡報」『文物参考資料』1958年第7期64頁図16
- (26) 王倉西「扶風博物館蔵歴代銅鏡紹介」『文博』1988年第4期81頁図4-3
- (27) 郭子直・龐文龍「岐山県博物館蔵古代銅鏡選萃」『考古与文物』1992年第1期15頁図6-4
- (28) 宮内庁書陵部『古鏡目録』(1976年)図版101, 滋賀県立近江風土記の丘資料館『近江の銅鐸と銅鏡』(1981年)図版番号なし, 註(15)天理参考館前掲カタログ, 図版50
- (29) F. Waterbury 『Bird Diets in China』(1952年)PL. 43, 張金儀『漢鏡所反映的神話伝説与神仙思想』(1981年)図版19
- (30) 註(14)前掲カタログ, 図版15・16, 福知山市教育委員会『駅南地区発掘調査報告書』(福知山市文化財調査報告16)(1989年)図版67, 辰馬考古資料館『考古資料図録』(1988年)図版66, 註(15)五島美術館カタログ, 図版70・71
- (31) 註(30)辰馬考古資料館前掲書図版66解説
- (32) 国立歴史博物館編輯委員会『浄月澄華—息斎蔵鏡』(2001年)図版63
- (33) 橿原考古学研究所附属博物館『大和の古墳の鏡』(1992年)図版11, 同前ほか『大和まほろば』(1998年)43頁
- (34) 雪野山古墳発掘調査団『雪野山古墳—第一次発掘調査概報』(1990年)図25
- (35) 大分県立宇佐風土記の丘歴史資料館『古墳文化の世界』(1989年)図5-1
- (36) 黒塚34号鏡にも見える。註(2)前掲カタログ, 44・45頁
- (37) 註(12)弘津前掲書, 保坂三郎『古代鏡文化の研究』1(1986年)図版128
- (38) 広島県立歴史民俗資料館『ひろしまの青銅器』(1993年)3-18
- (39) 西村俊範『開明堂英華』(1994年)図版50

- (40) 註(2)前掲カタログ, 93頁,
- (41) 梅原末治『欧米における支那古鏡』(1931年)図版42-1, 梅原末治『欧米蒐儲支那古銅精華』1(1933年)図版91
- (42) 註(11)前掲カタログ, 図版26, 註(14)前掲カタログ, 図版45
- (43) 樋口隆康『三角縁神獸鏡綜鑑』(1992年)図版11下
- (44) 王士倫『浙江省出土銅鏡選集』(1987年)図版11,
- (45) 註(22)神戸市前掲書, 37頁図67, 註(22)神戸市前掲カタログ, 図版15, 埋蔵文化財研究会『倭人と鏡—3・4世紀の鏡と資料』(1994年)図7, 『北九州市立考古博物館紀要』第7号(2000年)32頁図1
- (46) 埋蔵文化財研究会『倭人と鏡—3・4世紀の鏡と資料』(1994年)図版7, 北九州市立考古博物館『北九州市立考古博物館紀要』第7号(2000年)32頁図1
- (47) 『故宮文物月刊』1992年第2期, 図21, Toru Nakano『Bronze Mirrors from Ancient China Donald H. Graham JR Collection』(1994年)図版55
- (48) 大分県立宇佐風土記の丘歴史資料館『古墳文化の世界』(1989年)図版5-2
- (49) 福岡市教育委員会『福岡市西区藤崎遺跡』(福岡市埋蔵文化財調査報告80)(1982年)図版44, 山梨県立考古博物館『古代甲斐国と機内王権』(1986年)図版4, 註(1)田中前掲書第32図
- (50) 王士倫『浙江省出土銅鏡』(1987年)図版14
- (51) 註(19)梅原前掲書, 図版8-1
- (52) 梅原末治『紹興古鏡聚英』(1939年)図版59
- (53) 野洲町立歴史民俗資料館『大岩山古墳群とその周辺』(1993年)
- (54) 註(28)宮内庁前掲カタログ図版4
- (55) 『目の眼』1988年8月号
- (56) 註(1)田中前掲書第97図
- (57) 註(21)奈良県前掲書, 図版45
- (58) 註(14)京都府立山城郷土資料館ほか前掲カタログ図版45
- (59) 画文帯の意味内容については, 筆者前稿を参照されたい。西村俊範「漢鏡の二・三の問題について」『人間文化研究』第29号(2012年)
- (60) 註(21)奈良県前掲書, 図版53, 註(2)前掲カタログ, 73頁下
- (61) 註(14)前掲カタログ, 図版161, 註(11)前掲カタログ, 図版18, 註(15)天理前掲カタログ, 図版57
- (62) 註(21)奈良県他前掲書, 図版44, 註(2)前掲カタログ, 73頁上
- (63) 陝西省文物管理委員会『陝西出土銅鏡』(1959年)図版77
- (64) 註(39)西村前掲書, 図版62
- (65) 註(2)奈良県他前掲書, 図版46, 註(14)前掲カタログ, 図版172, 岡山県立博物館『館藏品優品図録』(1991年)図版9, 註(6)前掲書, 358頁図版290

- (66) 『河内における古墳の調査』(1967年)図版18
 (67) 和田山町教育委員会『城の山池田古墳』(1972年)図版18
 (68) 大阪市立美術館『漢代の美術』(1975年)図版244
 (69) 陳寶琛『澗秋館吉金図』(1930年)67葉左
 (70) 註(63)陝西省前掲書, 図版76
 (71) 陳佩芬『上海博物館青銅鏡』(1987年)図版64
 (72) 註(21)橿原考古学研究所前掲書, 図版54
 (73) 村井崑雄『古墳』(日本の美術57)(1971年)60頁75図
 (74) 註(9)高槻市前掲書, 図版25
 (75) 註(43)に同じ
 (76) 註(49)山梨県前掲書, 図版1・2・3
 (77) 註(43)樋口前掲書, 図版11上
 (78) 註(49)山梨県前掲書, 図版9
 (79) 註(43)樋口前掲書, 図版14。なお, 神戸市東求女塚古墳出土の二神三獣一虫鏡(目録番号112)は玄武が確認出来るが, それ以外の文様が不鮮明なために考察から外している。
 (80) Eleanor von Erdberg『Chinese Bronzes from the Collection of Cester Dalland Dolly Carter』(1978年)p. 196, no. 119
 (81) 四川省博物館・重慶市博物館『四川出土銅鏡』(1960年)図版40
 (82) 踏み返し品である。河北省文物研究所『歴代銅鏡紋飾』(1996年)図版91
 (83) 徳陽市文物考古研究所・什邡市文物保護管理所「四川什邡市虎頭山成漢至東晉時期崖墓群」『考古』2007年第10期26頁図10-1
 (84) 梁上椿『巖窟藏鏡』2下(1941年)図版74
 (85) 范平「湖北襄樊出土一件東漢銅鏡」『文物』1992年12期
 (86) 例として以下のものがある。(右1)浮彫式獸帯鏡, 『文物』2011年第10期27頁図9。(右2)盤龍鏡, 周世榮『銅鏡図案』(1986年)図版37。孔祥星『中国銅鏡図典』(1992年)図版349。(中)浮彫式獸帯鏡, 『考古』1978年第3期161頁図5-1。孔祥星『中国銅鏡図典』(1992年)図365。(左)盤龍鏡, 丁孟『銅鏡鑒定』(2000年)4頁。他に, 寧楽美術館蔵鏡にも見える。樋口隆康『古鏡図録』(1979年)図版98
 (87) 註(14)前掲カタログ, 図版171
 (88) 佐野美術館『佐野美術館藏品抄』(1986年)図版126, 註(14)前掲カタログ, 図版45, 註(11)前掲カタログ, 図版26
 (89) 註(21)奈良県立前掲書, 図版67
 (90) 註(38)広島前掲カタログ, 3-16
 (91) 五島美術館『東京オリンピック記念明鏡特別展』(1964年)図版44, 保坂三郎『古代鏡文化の研究』2(1986年)図版39, 三重県埋蔵文化財センター『三

重の古鏡』(1991年)図版6。なお、神仙の右側と下部に見える幅広の棒状物は、註(4)で述べた同向式二神二獸鏡の部分模倣である。

- (92) なお、本論では取り上げなかった文様に唐草文(雲文)がある。この文様はいたって簡略な幾何学的といってもよい文様で、中国鏡の文様としては後漢前期の方格規矩四神鏡にまで遡り、獸帯鏡や盤龍鏡の鈕側や外区でも多用されている。三角縁神獸鏡には盤龍鏡から引き写された可能性が高い。もちろん模倣された文様の一つであり、「ネットワーク」などとは無縁のものである。従って、まずこの文様の多様性や時代変遷がどのようなものかを、後漢代に遡ってしっかり把握しておくことが肝要である。模倣の実態はさほど単純なものとは思われない。車崎正彦「三角縁神獸鏡の年代と古墳出現の年代」『史観』第159冊(2008年)99頁。
- (93) 福山敏男「景初三年・正始元年三角縁神獸鏡銘の陳氏と杜地」『古代文化』1974年第11期
- (94) 『週刊新潮』2011年6月16日号
- (95) 町田章「古代帯金具考」『考古学雑誌』第56巻1号(1970年)47頁
- (96) 洛陽の骨董市で購入されたと報じられた三角縁神獸鏡は、中国における正式の発掘品ではない。だからといって、「中国で出土したと断定できる証拠もない」などと寝惚けた考古評論家のような話をしていても何も解決したことにはなっていない。まずなすべきことは、資料として取り扱って良いものなのかどうかを調べ、もし良いものならば表面状態から出土場所を見分けてみる作業である。三角縁神獸鏡の研究者としてなすべき仕事をまず果たすべきである。『朝日新聞』2015年3月2日朝刊、同じく6月25日夕刊



図1 画文帯同向式神獸鏡(和泉黄金塚古墳出土)(東京国立博物館蔵)

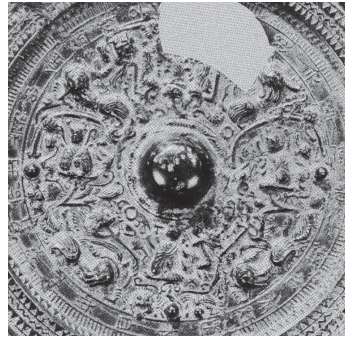


図2 三角縁同向式神獸鏡(柴崎蟹沢古墳出土)(東京国立博物館蔵)



図3 三角縁同向式神獸鏡(神原神社古墳出土)(文化庁所蔵、鳥根県立古代出雲歴史博物館保管)



図4 半円方格帯同向式神獸鏡(安満宮山古墳出土)(国(文化庁)所管、高槻市教育委員会提供)



図5 画文帯同向式神獸鏡(根津美術館蔵)



図6 三角縁同向式神獸鏡(椿井大塚山古墳出土)(京都大学総合博物館蔵)



图7 三角縁同向式神獸鏡
(下松宮ノ洲古墳出土)
(東京国立博物館蔵)



图8 画文帯同向式神獸鏡
(古式)



图9 画文帯同向式神獸鏡
(京都石不動古墳出土)
(京都大学総合博物館蔵)



图10 三角縁環状乳神獸鏡
(五島美術館蔵)



图11 環状乳神獸鏡



图12 三角縁環状乳神獸鏡
(安満宮山古墳出土)(国(文化庁)
所管, 高槻市教育委員会提供)



図13 対置式神獸鏡
(湖北省頤城出土)



図14 三角縁対置式神獸鏡
(佐味田宝塚古墳出土)
(東京国立博物館蔵)



図15 三角縁対置式神獸鏡
(椿井大塚山古墳出土)
(京都大学総合博物館蔵)



図16 三角縁神人龍虎画像鏡
(黒塚古墳出土)
(奈良県立橿原考古学研究所提供)



図17 神人龍虎画像鏡
(西求女塚古墳出土)
(神戸市教育委員会提供)

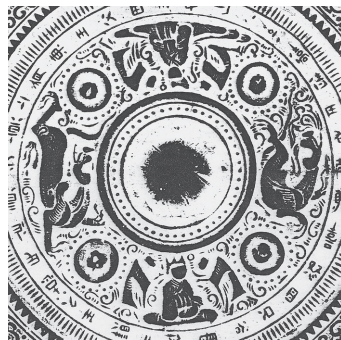


図18 神人龍虎画像鏡



図19 神人龍虎画像鏡(個人蔵)

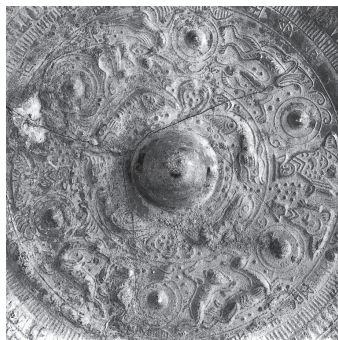


図20 盤龍座画像帶鏡
(伝帯解出土)(五島美術館蔵)

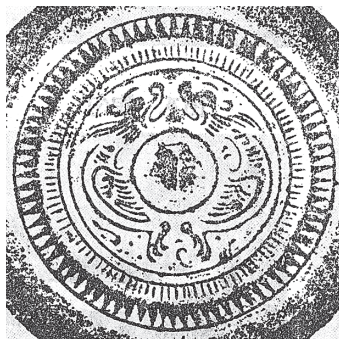


図21 盤龍鏡(陝西出土)



図22 盤龍座画像帶鏡
(北山茶白山古墳出土)
(宮内庁書陵部蔵)

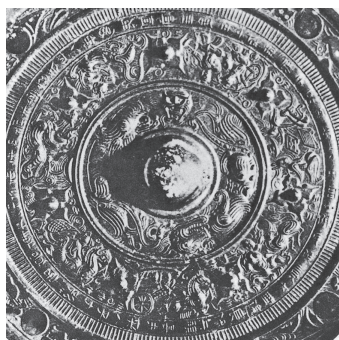


図23 盤龍座画像帶鏡
(ボストン美術館蔵)



図24 景初四年盤龍鏡
(辰馬考古資料館蔵)

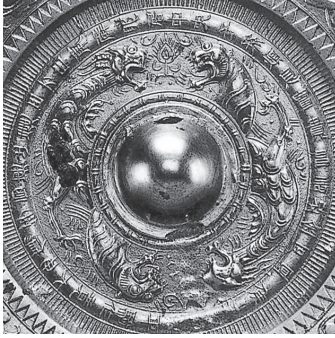


図25 盤龍鏡(台湾・個人蔵)



図26 三角縁盤龍鏡
(桜井池ノ内5号墳出土)
(奈良県立橿原考古学研究所提供)



図27 盤龍鏡(根津美術館蔵)



図28 神仙像
(東京国立博物館蔵)

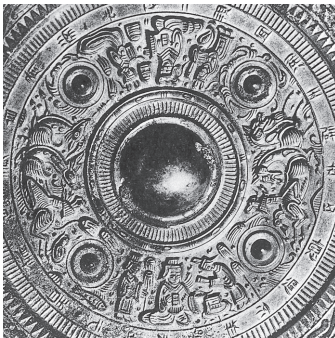


図29 画像鏡(大英博物館蔵鏡)



図30 三角縁神獸鏡
(椿井大塚山古墳出土)
(京都大学総合博物館蔵)



図31 三角緑神獸鏡
 (桜井金ヶ崎古墳出土)
 (東京国立博物館蔵)

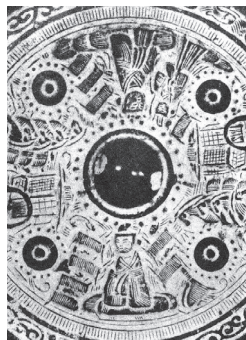


図32 羽人の表現
 (伝紹興出土神人車馬画像鏡より)



図33 傘松形
 (西求女塚3号鏡より)
 (神戸市教育委員会提供)



図34 画文帯同向式神獸鏡
 (D.H. グラハム氏蔵)



図35 三角緑神獸鏡
 (大分赤塚古墳出土)
 (京都国立博物館蔵)

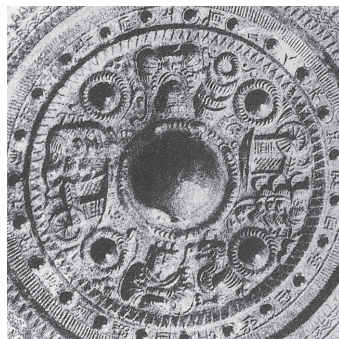


図36 三角緑神獸鏡
 (山梨銚子塚古墳出土)
 (東京国立博物館蔵)



図37 太康二年(281)対置式神獸鏡
(浙江省出土)

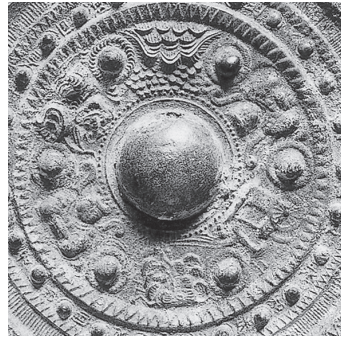


図38 三角縁神獸鏡
(岡山湯迫車塚古墳出土)
(東京国立博物館蔵)



図39 神人車馬画像鏡
(伝浙江省紹興出土)

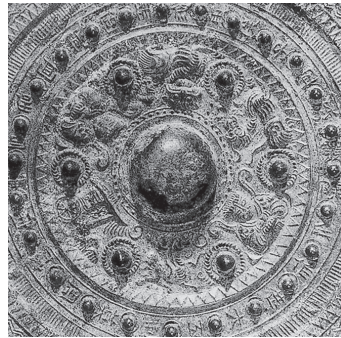


図40 三角縁神獸鏡
(滋賀大岩山古墳出土)
(東京国立博物館蔵)



図41 三角縁神獸鏡
(クリスティーズ取扱い)



図42 三角縁神獸鏡(奈良新山古墳
出土)(宮内庁書陵部蔵)



图43 三角縁神獸鏡(黑塚古墳出土)
(奈良県立橿原考古学研究所提供)



图44 三角縁神獸鏡(樺井大塚山古墳出土)
(京都大学総合博物館蔵)



图45 三角縁神獸鏡(黑塚古墳出土)
(奈良県立橿原考古学研究所提供)



图46 三段式神仙鏡
(陕西省乾县出土)



图47 三段式神仙鏡
(根津美術館蔵)



图48 三角縁神獸鏡(伝岡山出土)
(岡山県立博物館蔵)



図49 三段式神仙鏡
(五島美術館蔵)

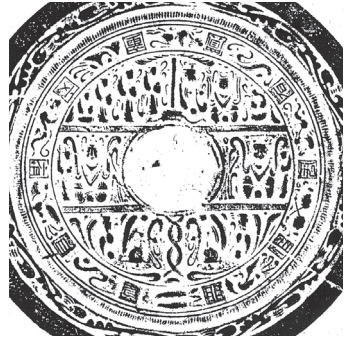


図50 三段式神仙鏡



図51 三角縁神獸鏡(黒塚古墳出土)
(奈良県立橿原考古学研究所提供)



図52 三角縁神獸鏡
(静岡松林山古墳出土)
(東京国立博物館蔵)



図53 方銘四獸鏡
(プリンストン大蔵)



図54 盤龍座方銘獸帶鏡
(梁上椿氏旧蔵)



図55 浮彫獣帯鏡
(遼東博物館蔵)



図56 玉兔搗藥像



図57 三角縁神獸鏡
(椿井大塚山古墳出土)
(京都大学総合博物館蔵)



図58 三角縁神獸鏡
(福岡沖ノ島出土)(宗像大社蔵)